

事例 1

相互評価を生かして小論文を書く

1 育成を目指す言語能力

論理的な文章を読んで関心をもったことについて自分の考えを書くという言語能力を育成する。新学習指導要領の「現代文B」の指導事項「ウ 文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。」や、「エ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。」を指導の中心に取り上げる。そして、「表現効果を吟味して自己評価や相互評価を行い、それを自分の文章の推敲に役立てている。」という評価規準を中心にして評価する。また、言語活動例の「エ 文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表したり報告書や論文集などに編集したりすること。」を参考にして設定した、「相互評価を生かして小論文を推敲する」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

評論文を読む指導においては、テキストを読んで「解釈」することに指導が偏りがちである。特に、生徒にとってテキストの難易度が高い場合、生徒はその内容に関心をもったり、自分自身の問題として主体的に考えたりするまでには至らない。一方、教師は、内容を咀嚼して解説する指導に陥りやすい。その結果、生徒は授業に対して受け身になってしまう。そこで、生徒がテキストの内容に関心をもち、積極的にテキストに関わる指導を工夫した。ここでは、小論文を書くことに指導を重点化し、そのためにテキストを読むこととした。また、作品の表現効果について自己評価や相互評価を行わせ、それらを生かして文章を推敲するという言語活動を取り入れた。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 「メディアは何を変えるのか?——インターネットやケータイ」(杉本 卓)

(2) 単元の目標

- ①論理的な文章を読んで関心をもったことについて自分の考えを文章にまとめようとする。
(関心・意欲・態度)
- ②書くための発想を広げたり情報を整理したりして、自分の考えを文章にまとめる。(書く能力)
- ③表現効果を吟味して自己評価や相互評価を行い、それを自分の文章の推敲に役立てる。
(書く能力)
- ④小論文を書くために必要な考察の型や論理的な文章展開の型を理解する。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
①論理的な文章を読んで関心をもったことや自分の考えを文章にまとめようとしている。	①書くための発想を広げたり情報を整理したりして、自分の考えを文章にまとめている。 ②表現効果を吟味して自己評価や相互評価を行い、それを自分の文章の推敲に役立てている。	①小論文を書くために必要な考察の型や論理的な文章展開の型を理解している。

(4) 指導と評価の計画(6時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1 2	本文の内容に関心をもって課題を設定する (1) 本文を黙読し、印象に残った文を抜き出す。 (学習活動その1)資料1 (2) 本文を黙読し、「学習活動その1」で抜き出した文の中から、最も興味・関心をもった文を一つ選ぶ。 (学習活動その2)資料1 (3) 「学習活動その2」で選んだ文の内容と自分との関わりについて説明する文を書く。 (学習活動その3)資料1	○必要に応じて繰り返し読ませる。 ○複数の文を抜き出させる。 ○書き方の例を示す。	書く能力① (ワークシート資料1への記述の確認)
3 4	小論文を書く (1) 小論文の型を知る。 (2) インターネットを使って情報収集する。 (3) 小論文を書く。 (4) 小論文を自己評価する。	○副教材を使用して、小論文の書き方についていくつかの型を示す。 ○コンピュータ室を利用する。 ○自分の文章を客観的な視点から評価させる。	書く能力① 言語文化と国語の特質① (ワークシート資料2への記述の確認)
5 6	自己評価や相互評価を生かして小論文を推敲する (1) 4～5人のグループで小論文を回覧し、他者の小論文について、「ほめてあげたい点」と「改善へのアドバイス」を、二色の付箋に書き分けて指摘する。 (2) 自己評価や相互評価を生かして小論文を推敲する。 (3) 推敲した小論文について自己評価する。	○小論文は生徒の名前を記号化して伏せた上で、コピーしたものを配布する。 ○遠慮なく指摘できるように、付箋には無記名で指摘事項を記入させる。 ○他者の指摘を見て影響されないように、記入済みの付箋は回覧終了後に貼る。 ○単元全体の学習活動に対する感想も記入させる。	書く能力② 言語文化と国語の特質① (ワークシートへの記述の確認)

※「関心・意欲・態度」は単元全体を通して評価する。

3 評価の例

ここでは、生徒の自己評価「よく書けたと思う点」及び「改善が必要な点」と、相互評価「ほめてあげたい点」及び「改善へのアドバイス」をもとに、指導の成果を振り返ってみる。

自己評価「よく書けたと思う点」	
・具体例・実例を挙げている。 ・漢字を多く使った。 ・理由が書けた。 ・伝えたいと思ったことは書けた。	・体験談を入れて書けた。 ・自分なりに考えて書けた。 ・考えを発展することができた。 ・序論・本論・結論の構成で書けた。

自己評価「改善が必要な点」	
・言いたいことや伝えたいことが言葉にできない。 ・同じことを繰り返してしまった。 ・無理に文を伸ばしてしまった。 ・まとめ方がわからない。 ・テーマに合っていない。 ・言葉が足りない。 ・言い回しが不適切。 ・何が言いたいのかわからない。 ・指示語を使えばよかった。	・読点をうちすぎて、文が細切れ。 ・同じ言葉を使い過ぎ。 ・まとまっていない。 ・具体例がない。 ・字が汚い。 ・表現が変。 ・くどい。 ・起承転結が滅茶苦茶。 ・段落変えのポイントがわからない。

相互評価「ほめてあげたい点」	
・自分の意見をはっきり述べている。 ・内容が興味深い。 ・小論文的な書き方だ。 ・体験談が書かれていてよい。 ・起承転結ができています。 ・終わり方がまとまっている。 ・字がていねいで読みやすい。 ・言葉の使い方が上手。 ・漢字がきちんと書けている。 ・キーワードに「」がついているのがいい。 ・話の流れがスムーズ。	・意見と理由がはっきりしている。 ・まとまっている。 ・わかりやすい。 ・具体例が挙げられていてわかりやすい。 ・序論・本論・結論がしっかりしている。 ・反対意見にも触れているのがよい。 ・言い回し、歯切れがよい。 ・頭がよさそうな書き方。 ・着眼点がよい。 ・一文一文の量が適切。

相互評価「改善へのアドバイス」	
・字を大きく、濃く、丁寧に。 ・読めない字がある。 ・「、」が少ない。 ・「、」が多い。 ・自分の意見をもっと書くべき。 ・「思う」が多い。 ・誤字、脱字がある。 ・同じこと、同じ言葉を繰り返さない方がよい。 ・まとまっていない。 ・逆説の接続詞の使い方が不適切。 ・論点がずれている。 ・原稿用紙の使い方が間違っている。 ・「です・ます」と「だ・である」が混じっている。 ・一文が長い。 ・不必要な文がある。	・段落がない。 ・改行したほうがよい。 ・段落を分け過ぎ。 ・わかりにくい。 ・何が言いたいのかわからない。 ・慣用句の使い方が間違っている。 ・反対意見にも触れた方がよい。 ・ひらがなが多過ぎる。 ・主語述語が変なところがある。 ・説明で終わっている。 ・話し言葉が混じっている。 ・「なぜなら～からである」の言い回しができていない。 ・文字稼ぎに必死なのではないか。

最後に、友人からのアドバイスを踏まえて小論文を推敲した後の自己評価（感想）を示す。

推敲後の自己評価（感想）
・指摘された部分の全部は直せなかったけれども、前回よりは上手く書けたと思う。自分ではわからなかったところを指摘してもらえたので、これからの参考にしたい。 ・最初、みんなのアドバイスを読んで傷ついた。でも、みんなのアドバイスを取り入れてみると、自分でも前より良く書けたのがわかった。だから、そういうことをふまえて、よりよい文章を書けるようにしたい。 ・普段誰かに作品を見せて、それを評価してもらうことなどなかったもので、自分の文の悪いところがよくわかって良かった。（お世辞かもしれないが）よい方のコメントが嬉しかった。 ・読んでくれた人からのアドバイスを見て、「なるほど」と思ったことがたくさんあった。自分でわかっていていたこともわからなかったことも、しっかり意識して書き直せたと思う。 ・ほめられてみて、いい部分はそのまま生かし、直した方がいいところを注意したら、前よりよくなったと思う。指摘されると、自分の悪いところがわかるので助かった。 ・他人の意見があると、とても書きやすくなる。「うまく書けている所がある」と書いてもらうことによって、自分に自信がつく。

ほとんどの生徒が、相互評価で指摘を受けた「改善へのアドバイス」を、自己評価で「改善が必要な点」として挙げたことを推敲に生かしていた。「書く能力」「知識・理解」については、指導前の時点で既に個人差があるが、この試みからは指導者も生徒もその向上に手応えを感じた。推敲後の自己評価（感想）の多くが肯定的な内容であることから、意欲的な取組であったことが分かる。なお、推敲前と推敲後の作品の例を資料3に示す。1例のみであるが、他の生徒の学習活動においても、ほぼ同じように相互評価やそれを踏まえた推敲がなされた。

4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のような点が挙げられる。

ア 学び合いを通じた「書く能力」の高め合い

生徒の小論文を教師が逐一添削指導しなくても、指導方法を工夫することで、生徒は自己評価や相互評価を通して推敲の視点に気づき、学び合いを通して能力を高め合うことができる。この指導を通して、学び合いの大切さとその効果を確認できた。

イ 「書くこと」に対する「関心・意欲」の高まり

大学入試や就職試験の対策として、教師は、生徒に意見文や小論文を書かせ、多大な労力をかけて赤ペンで添削をすることがある。しかし、それがかえって生徒の「書くこと」への抵抗感を増幅させているかも知れない。この事例では、自己評価や相互評価を踏まえて作品を推敲するという活動が生徒には新鮮だったようで、意欲的に取り組んでいた。

ウ 「書く能力」の向上の実感

生徒の自己評価の記述からも、自分の文章がよりよくなることを実感できたことに手応えを感じた様子がみられた。

エ 「書くこと」に関する指導の改善

評論の指導は、講義形式による「読むこと」の指導に偏りがちであった。そこで指導のねらいを「書くこと」に重点化して、現代文の指導事項に沿って指導を展開することができた。

(2) 課題

課題としては、次のようことが挙げられる。

ア 効果的なグループ活動の工夫

本事例の計画に当たって参考にした『図解 フィンランド・メソッド入門』の、「批判的思考力」の項には、次のような指導例が紹介されている。

完成した作文を班員それぞれが読みます。そして、それぞれが作文の「いいところ」と「悪いところ」を十個ずつ挙げるのです。班員が四人だとすると、書き手を除く三人がこの作業をしますので、「いいところ」と「悪いところ」が三十個ずつ集まります。それから、全員で話し合っ、て、「いいところ」と「悪いところ」を十個ずつにしばりこむのです。

書き手は、「悪いところ」を改善しつつ、全文を書き直します。

これで完成——ではありません。

書き直した作文をとりの班に渡して、同じ作業をやってもらいます。つまり、とりの班の各人が、「いいところ」と「悪いところ」を十個ずつ挙げ、集まった「いいところ」と「悪いところ」を、話し合っ、て十個ずつにしばりこむ。その結果にしたがって、書き手はまた全文を書き直すのです。

これで完成の場合もありますが、他のすべての班に渡して「いいところ」と「悪いところ」を挙げてもらふこともあります。

『図解 フィンランド・メソッド入門』58ページより

しかしながら、この指導法をそのまま取り入れようとしても、生徒は互いの作品を批評し合うという活動に不慣れである。そこで、ここでは相互評価の入門編と位置付けて、次のようなアレンジをした。

- ・グループの人数を五、六人とする。
- ・「ほめてあげたい点」と「改善へのアドバイス」を、各人が一個ずつ指摘させる。
- ・生徒の作品は、名前を伏せてコピーして配付する。
- ・相互評価を付箋に書く際も、遠慮のないように匿名で記入させる。
- ・他者の指摘を見て影響されないように、記入済みの付箋は回覧終了後に貼る。
- ・推敲は一回とする。

ところで、生徒が書いた意見文や小論文について推敲の指導をする場合、添削と推敲を三回繰り返して、ようやく「概ね満足」もしくは「十分満足」の域に達するというのが、一般的な状況なのではないだろうか。その点で、フィンランド・メソッドで紹介された指導法は、「改善点」を教師が指摘するか生徒が指摘するかの違いや、「改善点」を話し合っ、て絞り込むというような違いはあるが、練り上げられるまでの推敲の過程は似ている。今回は、「十分満足できる」と判断される状況まで練り上げるには、実際にはあと数回の推敲を要した。今後は、「書く能力」の更なる向上のために、フィンランド・メソッドで紹介された指導法を参考に、効果的なグループ活動を工夫したい。また、そのために、国語の授業における生徒同士の人間関係づくりを進められるように配慮したい。

イ 生徒の興味、関心が低い内容のテキストを扱う際の指導の工夫

本事例で扱ったテキストの内容は、生徒にとっても身近な話題に関するものであったため、自ずと生徒の関心を引き出すことができた。しかし、たとえば芸術論など、生徒が興味関心を示しにくい内容のテキストを扱う際に、指導の手法や内容をさらに工夫する必要がある。

使用教科書・副教材

・『精選 現代文』東京書籍

・『サクセス小論文ノート』桐原書店

参考文献

・北川達夫、フィンランド・メソッド普及会著『図解 フィンランド・メソッド入門』経済界、2005年

メディアは何を変えるのか？

——インターネットやケータイ

() 年 () 組 () 番 氏名 ()

「学習」

学習活動その1

教科書 p 72 ～ p 80 を読んで、印象に残った文を抜き出す。

--

学習活動その2

(本文を繰り返し読み)「活動その1」で抜き出した文の中から、最も興味・関心をもった文を一つ選ぶ。

--

学習活動その3

その文を選んだ理由を説明する。選んだ文の内容と自分との関わりも考える。

--

生徒の作品例

推敲前(付箋に「ほめてあげたい点」と「改善へのアドバイス」が書いてある)

6A 字が大きい 6A 実体験や具体例があり、中身の話し方まですばらしいと思います。	6A 約600字で、 分かりやすい文章 6A 例としてあげている点、 体験談がよいと思う。	6A 字が大きくて見やすいです。 6A 1と3、7、11 いいと思う。
---	--	---

○小論文を書いてみよう

「自分で選んだ一文について、あなたの考えを述べなさい」(600字以内)

自分で選んだ一文
 何気ない一言でも、背後にある感情や意図に関して、送り手と受け手の間で
 乖離が生じ、それによって過激な感情的言葉の応酬が起これることも
 少なくない。

	私	が	こ	の	一	文	を	選	ん	だ	理	由	は	、	直	接	話	を	レ
て	い	な	い	以	上	、	自	分	の	意	図	や	感	情	を	正	確	に	伝
え	る	事	思	は	難	し	い	う	こ	と	を	表	し	て	い	る	一	文	
だ	と	自	分	も	、	友	人	と	メ	ー	ル	を	し	て	い	る	時	、	あ
一	文	で	話	が	噴	き	出	る	な	く	な	、	た	こ	と	が	あ	る	あ
口	論	意	図	で	私	は	直	接	に	面	し	て	い	な	い	相	手	に	正
の	そ	の	情	を	伝	え	る	こ	と	は	容	易	に	分	か	れ	た	だ	け
感	動	的	言	葉	の	応	酬	が	初	め	か	ら	あ	る	の	仲	が	修	不
能	年	生	の	経	験	を	話	す	こ	の	場	合	に	、	近	く	に	居	十
て	も	話	す	こ	の	場	合	に	、	近	く	に	居	十	人	で	互	い	
を	攻	撃	し	て	い	な	う	な	こ	と	が	起	こ	う	な	る	の	が	
イ	ン	タ	ー	の	上	で	飛	び	上	る	こ	と	は	確	か	に	使		
掲	示	板	上	で	飛	び	上	る	こ	と	は	確	か	に	使			400	
や	人	格	攻	撃	が	飛	び	上	る	こ	と	は	確	か	に	使			
イ	ン	タ	ー	の	上	で	飛	び	上	る	こ	と	は	確	か	に	使		
な	ハ	タ	ー	の	上	で	飛	び	上	る	こ	と	は	確	か	に	使		
ッ	上	の	話	を	話	す	こ	の	場	合	に	、	近	く	に	居	十		
利	な	も	の	で	あ	る	こ	と	は	確	か	に	使						
ッ	自	分	で	選	ん	だ	一	文	が	、	感	情	的	に	な	る	こ	の	
で	い	る	こ	と	を	選	ん	だ	一	文	が	、	感	情	的	に	な	る	こ
こ	れ	に	つ	い	て	、	私	は	同	意	だ	。	そ	し	て	、			600

自己評価

よく書けたと思う点
 自分の体験談や例と導けることができた。

改善が必要な点
 自分の考えをしっかりとまとめたかった。
 文末のくくり方。

6A 最後の「この文を」は必要ですか?

6A 難い字にはっているところがある。でも、よく見るといい。

6A 具体例の数が多く、意見の印象があまり残らないので、具体例を少し削り、自分の意見を述べる箇所を増やしたところ。

メディアは何を変えるのか？

-----インターネットやケータイ

「自分で選んだ一文について、あなたの考えを述べなさい」(600字以内)

私がこの一文を選んだ理由は、直接話をし
ていない以上、自分の意図や感情を正確に伝
えることは難しいということを表している一
文だと思ったからだ。

自分も、友人とメールをしている時、ある
一文で話が噛み合えなくなったりすることがある。
口論まで発展することはないが、自分の
の意図や感情が伝わらず誤解が生じたのだ。
そこで私は直接対面していい相手に正確な
感情を伝えることは容易ではないと知った。

ある話で、二人の意見が少し分かれただけ
で感情的言葉の応酬が勃発し、両者の仲が修
復不可能となったという話がある。その二人
は十年以上の付き合いで人生経験も豊富だっ
た。それなのに、近くに居ても全く話そうと
もせず、ひたすらメールで互いを攻撃し合っ
ていたそうだった。

これと同じようなことが起こっているのが、
インターネットでの掲示板だろう。掲示板上
である一つのことについての誹謗中傷や人格
攻撃の書き込みが飛び交っているのをよく目
にする。インターネット上では面と向かって
物を言わないが、「匿名」を使って自由に自
分の思ったことを発言しているのだ。

上記の話を語った人物は、メールとは確か
に便利なものではあるが、感情的になると危
険なツールであると言っていた。これについ
て、私は同意をする。そして、私はこの言葉
と自分で選んだ一文が多少なりともリンクを
しているのではないかと思った。

感想

題材が難しかったので書くことも苦勞をしたが、これからこういう論文を書くこと
が必要なので良い勉強になったと思う。
それと同時に、他人からのアドバイスもたくさんもらうことができたので、どこを活かし
どこを訂正すれば良いのかも分かったのが良かった。